

胸をうつハリス氏の演説

鴻巣友季子



大統領選勝利の報道を受け米デラウェア州ウィルミントンで演説するハリス氏は11月 (ゲッティ=共同)

「声を届ける」女性の長い闘い

米大統領選で勝利した民主党の副大統領候補カマラ・ハリス氏の演説が大きな話題を呼んだ。母がインド、父はジャマイカの出身で、同国初の女性副大統領に就任するハリス氏の言葉を、翻訳家の鴻巣友季子さんに読み解いてもらった。

カマラ・ハリス次期米副大統領のスピーチでは、久しぶりに胸をうつ政治家の言葉を聴くことができた。そこには、さまざまな人たちの声のこだまが響いていた。女性初、黒人初、アジア系



米大統領選に勝利したジョー・バイデン氏とカマラ・ハリス氏の演説を見つめる女性たち 11月、テキサス州ヒューストン (AP=共同)

議員の「民主主義は状態ではなく、行動である」という死の直前の言葉が引用された。そして、100年以上に及ぶ女性参政権運動と公民権運動の歩みにふれた後、こう言った。「2020年のこの選挙でも、米国の新世代の女性たちは一票を投じることで、投票し声を届けるといふ基本的権利のための闘いを続けてくれました」。声を届ける (原文 to be heard) 声を聞かれる (こと) は、基本的権利であり、投票はその手段だと、繰り返し述べていることに留意したい。

「声を聞かれる権利」というこの短い語句は、万感の思いで発せられたに違いない。歴史上、女性にとつて公の場で発言することが、どれだけ困難であったことか。選挙前の副大統領討論会でも、ハリス氏は現ベンス副大統領に何度も話を遮られ、「副大統領、わたしが話しているのです」とにこやかに諭した。続けて思いたされるのは、エリザベス・ウォーレン上院

「わたしが最後ではない」少女ら励ます

議員だ。トランプ大統領が指名したセシジョンズ氏の司法長官就任をめぐる17年の審議会で、氏の過去の差別的言動を問題視した故コレッタ・スコット・キング氏 (キング牧師の妻) の手紙をウォーレン氏が読みあげようとすると、共和党議員に阻止され、審議からはずされるという信じがたいことが起きたのだ。古典学者メアリー・ピアード氏の講義録「舌を抜かれる女たち」によれば、こうして女性の公的発言を男性が封じる行為は、古代ギリシャの「オデュッセイア」で、夫の留守中に人前で話すことを息子に阻止された妻ペネロペイアの時代から綿々と続いているという。こうした抑圧的空気は、グレタ・トゥンベリ氏や大坂なおみ氏の抗議行動への批判にもつながっているのではないか。

ハリス氏は「わたしは副大統領となる最初の女性かもしれませんが、決して最後ではありません。このスピーチを見てくれている少女たちも、まさに問題なのは性別でも年齢でもない。思い、意志を強く、優しく、暖かく持続する心を持ち続けられるか。これからも期待しよう。」 (翻訳家)



「このす・ゆき」1966年3月東京都生まれ。「風と共に去りぬ」『誓願』など訳書多数。著書に『翻訳つてなんだろう?』など。

2020年
12月1日
火曜日
神戸新聞
分

まさに問題なのは性別でも年齢でもない。思い、意志を強く、優しく、暖かく持続する心を持ち続けられるか。これからも期待しよう。